



Title	地域集団アイデンティティと言語変異の関連性について
Author(s)	村島, 健一郎
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 119-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78154
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域集団アイデンティティと言語変異の関連性について*

村島健一郎**

This paper deals with the relationship between linguistic variation and “local identity.” It is generally maintained that language use is closely related to speaker’s feelings of identity as members of groups associated with localities. However, in Japanese sociolinguistics few researchers have dealt with this subject up until now. To explore the relationship between one particular accentual change in Osaka Japanese and the sense of identity that speakers of this dialect have of themselves as “Osakans”, I conducted two projects in this study: a questionnaire survey and a series of recorded interviews.

In the first phase of this study, the relationship between norms of language use and speakers’ identities as Osakans was investigated through a questionnaire, and the results are analyzed by means of multiregression analysis. Out of 197 people answering the questionnaire, 120 recognized themselves explicitly as Osakans. According to the results of the questionnaire, they identify themselves as Osakans strongly, and to a moderate but notable degree, they strive to use Osaka Japanese as much as possible regardless of place or occasion.

In the second phase of research, accentual variations in two-mora nouns in Osaka Japanese were investigated. Subjects were required to read a wordlist in an interview situation, and their utterances were recorded with a tape-recorder. The results indicate that the Class IV Accent in two-mora nouns (LLH), which is the

*On a Relationship between Linguistic Variation and Local Identity (Kenichiro MURASHIMA)

** 言語文化研究科博士後期課程

traditional one in Osaka Japanese, tends to reduce in frequency and shift to a new style (LHL). In the case of three subjects, an accent common to Tokyo Japanese (HLL) was dominant. The results of statistic analysis show strong correlation between Osakan identity and language use.

A comparison of the results of the two studies shows that the more strongly speakers identify themselves as Osakans, the more they use the LHL style and the less they use the HLL style. This result supports the hypothesis that there is a relationship between Osakans' local identity and their language use. However, the question of why Osakan identity is related to an innovative LHL style as opposed to the traditional traditional LLH style still remains to be explored. In order to explain this accentual change more exactly and in greater detail, it will be necessary to introduce into analysis other socio-psychological factors in addition to that of local identity.

はじめに

本研究では、「大阪人」という概念集団へのアイデンティティを設定し、集団アイデンティティと言語変化の関連性を考え、進行中の言語変化（大阪市内でのアクセント変化）への影響に関する説明を試みる。これまでの変異理論研究によって、言語変異と性別、年齢、社会階層などの社会的要因との関係が明らかにされてきた。また、しばしば、社会的にパターン化された言語変異を説明するために集団へのアイデンティティに言及されることもあるが、これまでのところどのように集団アイデンティティが言語の変化に働きかけているのかは明らかにされていない。

1 アイデンティティと言語変異

アイデンティティと言語項目の使用の関係について述べた先駆的な研究として Labov(1972)の Martha's Vineyard 島での調査があげられる。この調査では、

言語変項(ay), (aw)と職業、居住地域、教育程度、性別などの社会的要因との関連が調査されたが、Labov(1972)はこれらの社会的要因よりも、むしろ Martha's Vineyard に対する local identity が最も密接に関わり合っていると指摘する。

In the final analysis, the sound change being studied was associated with the assertion "I'm Vineyarder." The Martha's Vineyard study focused on the relation of social factors to linguistic change; it demonstrated that the direction and development of this change could not be understood without relating it to the basic categories of local identity.

(Labov(1972))

Martha's Vineyard には、ポルトガル人、イングランド人、ネイティブ・アメリカン、アフリカン・アメリカン¹⁾のエスニック集団が存在し、それらの間での変項(ay)の使用に差があることが指摘されているが、/ai/の最初の母音の中舌化(æi)はエスニック集団間の対置を際立たせるために発生したというよりは、Martha's Vineyard の住人と合衆国本土からやってくる観光客たち(summer people)との対置から発生したと考えられている。

言語習得と集団アイデンティティとの関係を体系的にまとめた研究としては Le Page(1985)がある。Le Page(1985)は、個人の言語行動を「自己確認行動(Acts of Identity)」²⁾と位置付け、次のように述べている。

「人は、折にふれ帰属(identified)したいと思っている1つあるいはそれ以上の集団と似通ったものになるように、自分の言語行動のシステムを作り出す。そのシステムは、各人が、

- (A) どんな集団であるか確認でき、
- (B) そうした集団の行動システムを観察し分析する機会も能力もあり、
- (C) 適宜、自分の行動を選択し、適合させるに十分な強い意欲があり、
- (D) さらに自分の行動を適合させることのできるものでなければならない。」

¹ ネイティブ・アメリカン、アフリカン・アメリカンは Labov(1972) 中では、それぞれ Indians、Blacks となっている。

² ハドソン (1980)

(Le Page(1985)、ハドソン(1988)から引用)

この Le Page(1985)の「自己確認行動」の理論に基づいて、Underwood(1985)はアイデンティティを“a feeling of closeness”と定義づけ、なまり (Texas accent) とアイデンティティの関係について述べている。この調査によると、テキサス州ではテキサス人に対して強いアイデンティティを持っているものほど、ステレオタイプ化 (単母音化した /ai/) された音声形式を用いるという結果がでている。ここで Underwood(1985)が強調していることは、アイデンティティとメンバーシップが必ずしも一致するわけではないということである。通常、ある集団に所属する個人はその集団にアイデンティティを持っているものである。しかし、その一方で、その集団から離脱したくてもできない場合もある。したがって、テキサス人という集団を考える場合にでさえ、その集団へのアイデンティティの強さの程度によって、言語項目の使用にも差が生まれてくるというのである。Labov(1972)は「地域へのアイデンティティは、メンバーシップの重要なカテゴリーである」と述べているが、それは必ずしもメンバーシップとは一致しない。Labov 自身も Martha's Vineyard への志向 (orientation) と先に示した言語変項(ay), (aw)の使用の関係を示している。

Table 1. 二重母音の中舌化と Martha's Vineyard への志向

(人数)		(ay)	(aw)
40	Positive	63	62
19	Neutral	32	42
6	Negative	9	8

(Labov(1972): () 内は引用者)

Table 1 によると、Martha's Vineyard に住む被験者の 65 人中 40 人が Martha's Vineyard に対して好意的な感情を抱いており、これらの人々は、否定的に感じている人々よりも中舌化された(ay), (aw)を使用する頻度が高いことが分かる。

日本においては、アイデンティティと言語使用を中心にして分析した研究は今のところ少ない。ロング(1990)のように因子分析によって方言意識と方言受容との関係を示す研究はあるが、個々の言語事象との関連での研究はない。しかし、これまでの言語変化の研究の中から集団アイデンティティが影響を及ぼしているのではないかと考えられる現象がある。近年、京阪式アクセントの中で、2 モーラ

名詞の第Ⅳ、Ⅴ類が融合しているという現象が、杉藤(1982)、中井(1988)、岸江(1989)、犬飼・吉田・柿原(1989)らによって報告され、音声学、音韻論からの説明がなされている。真田(1990)は、この現象をアクセントにおける neo-dialect と位置付けている。この現象は以下の i)、ii) のように、従来、語+助詞「が」の形では、LLH というアクセント型をとっていた第Ⅳ類名詞が LHL というアクセント型に変化することで iii) のような第Ⅴ類と同じアクセント型を取るようになるという現象である。

(i) 息^が (第Ⅳ類): LLH → LHL

(ii) 糸^が (第Ⅳ類): LLH → LHL

(iii) 雨^が (第Ⅴ類) : LHL

真田(1990)によると、この現象は京阪式アクセントをもつ話者が東京式アクセントの影響を受け、発生した変化であると考えられている。また、大阪人の多くは「東京弁は大阪弁とはアクセントが逆になっている」という一般的な知識を持っているが、このアクセント変化もこのような意識によって引き起こされているのではないかと考えられている。こう考えると、このような変化が単に音声的にオートマティックに発生するのではなく、変化を促進させる心理的要因があるのではないかと考える。ここでこの進行中のアクセント変化と大阪人へのアイデンティティの強さとの関係を知るための調査を行った。

2 調査

この調査は、被験者が持つ「大阪人」「大阪弁」³⁾へのアイデンティティと彼らの言語使用規範との間にはどのような関係があるのかを知るためのアンケート調査と1で示した2モーラ名詞第Ⅳ類のアクセント変化の実体を知るための発音調査の2つの調査が含まれている。

³⁾ここで言う「大阪弁」とは、大阪府下の地域で話されている言葉という程度の意味である。「大阪方言」などの用語もあるが、ここでは日常的に使われる「大阪弁」を用いた。

2.1 アンケート調査

2.1.1 調査方法

この調査は、その大阪人が自身の集団をどのように認識し、自身の言語使用をどのように意識しているかを知るために行われた調査である。大阪府在住の 17 才から 26 才までの男女 197 名を対象として調査は実施された。本調査に先だって、次のような質問項目を設け、自身を「大阪人」とであると認識している男女 120 名（高校生（男子 30 名、女子 10 名）、短大生（女子 36 名）、大学生（男子 28 名、女子 16 名））を分析の対象にしている。

あなたは以下の何人ですか。

(a) 大阪人 (b) 関西人 (c) その他

下記のようにアイデンティティに関する質問項目（以下 IDE）と言語使用に関する質問項目（以下 DIFF）が設定され、それぞれの質問項目には複数の質問が与えられている。それぞれの質問には a) から e) までの選択肢が用意され、順に 4 点から 0 点までで点数化されている。（ただし、DIFF の質問（1）（2）の場合は、e) から順に 4 点～0 点をつける。）IDE では 1～3 までを足し、DIFF では 1～7 までを足し、各々を個人のスコアとする。点数化されたデータは回帰分析にかけられ、ここでの説明変数は IDE、被説明変数は DIFF である。この回帰分析には SPSS を使用した。

アイデンティティに関する項目（IDE）

- (1) 「大阪人である」ということはあなたにとって重要なことですか。
 - a) 非常に重要である, b) やや重要である, c) どちらともいえない,
 - d) あまり重要ではない, e) 全く重要ではない
- (2) 大阪弁は、あなたにとって重要な言葉ですか。
 - a) 非常に重要である, b) やや重要である, c) どちらともいえない,
 - d) あまり重要ではない, e) 全く重要ではない
- (3) 大阪弁は、将来においても受け継がれるべきものだと思いますか。
 - a) 非常に重要である, b) やや重要である, c) どちらともいえない,
 - d) あまり重要ではない, e) 全く重要ではない

言語使用・規範に関する項目（DIFF）

- (1) 大阪弁が分からない人が周りにいるときは、大阪弁を話すべきではない。
a) 完全に同意できる, b) やや同意できる, c) どちらとも言えない,
d) あまり同意できない, e) 全く同意できない
- (2) 誰かが、標準語で話しかけてきたら、標準語で応えるべきだ。
a) 完全に同意できる, b) やや同意できる, c) どちらとも言えない,
d) あまり同意できない, e) 全く同意できない
- (3) 私は、どのような場所でも、大阪弁を話したい。
a) 話したい, b) どちらかと言うと話したい, c) 何とも言えない,
d) あまり話したくない, e) 全然話したくない
- (4) 家族と話すときは大阪弁で話す。
a) 非常によく話す, b) よく話す, c) 何とも言えない,
d) あまり話さない, e) 全然話さない
- (5) 先生と話すときは大阪弁で話す。
a) 非常によく話す, b) よく話す, c) 何とも言えない,
d) あまり話さない, e) 全然話さない
- (6) 同性の友人とは大阪弁で話す。
a) 非常によく話す, b) よく話す, c) 何とも言えない,
d) あまり話さない, e) 全然話さない
- (7) 異性の友人とは大阪弁で話す。
a) 非常によく話す, b) よく話す, c) 何とも言えない,
d) あまり話さない, e) 全然話さない

2.1.2 分析結果

IDEでの平均点は、4点満点で3.0点という高い値を示した。これはこの集団の成員は「大阪人」「大阪弁」に強いアイデンティティを抱いていることを示している。一方、DIFFでは4点満点で2.6点とスケールの中央値(2)より僅かに高い数値を示した。この点数化されたデータを回帰分析にかけると、両変数間の相関係数は.504 ($p < .001$)となった。

2.1.3 考察

前セクションの結果からこの「大阪人」たちは、「大阪人」「大阪弁」に強いアイデンティティを持ち、できるだけ大阪弁を使いたいと考えていることが分かる。そして、相関係数 .504 は両変数の間には強い相関があることを示している。つまり、「大阪人」「大阪弁」へのアイデンティティは、大阪弁の使用規範に強い影響を与えていると言える。ただし、これは飽くまで相関という観点からの考察であり、アイデンティティと言語使用・規範の間に直接的な因果関係があることを示すものではない。それでもアイデンティティは言語使用を説明する際の重要な変数であることには違いはないであろう。集団アイデンティティを形成するにあたってはその集団が置かれている社会的環境とも関係があり、この点についても考慮に入れる必要があると思われる。この問題については4の結論と課題で再度触れる。

2.2 発音調査

2.2.1 調査方法

発音調査は、2.1のアンケート調査の被験者の中の19才から26才までの20名（女性13名、男性7名）を対象に行われた。調査は、京阪アクセント体系で第IV類、第V類に含まれる単語をそれぞれ10単語を抜きだし、それらの単語表（Appendix 参照）を読んでもらった。1つの単語につき次の三種類の語、文、タイプ1：糸（語単独）、タイプ2：糸が切れた（語＋助詞「が」を持つ文）、タイプ3：糸、切れてしもた（埋め込み文）が用意され、それぞれを2回ずつ読んでもらった。ただし、以降で「語単独」というときはタイプ1とタイプ3の発話、40項目、「語」＋「が」はタイプ2の発話、20項目を指す。タイプ3の文は文章を読む上での共通語読みを排除するために用いたものである。録音には Aiwa Digital Audio Taperecorder HD-SI を使用した。さらに、被験者の使用アクセント型とアンケート調査で得られた被験者のアイデンティティ・スコアとの関係を見ていく。

2.2.2 分析結果

Figure 1（Figure 1内のH-Lは拍内下降を示す）が示しているように語単独の場合では、第V類においていわゆる拍内下降は1人の被験者でしか観察されなかった。また、IV、V類でもLH型が占める割合はほとんど同じであると言える。

Figure 2 の語+助詞「が」表では、第 IV 類において伝統型の LLH 型が依然保持されているが、新型の LHL 型が支配的であるといえる。これは、真田(1987)の西宮調査で HLL 型が支配的であったのとは対照的である。

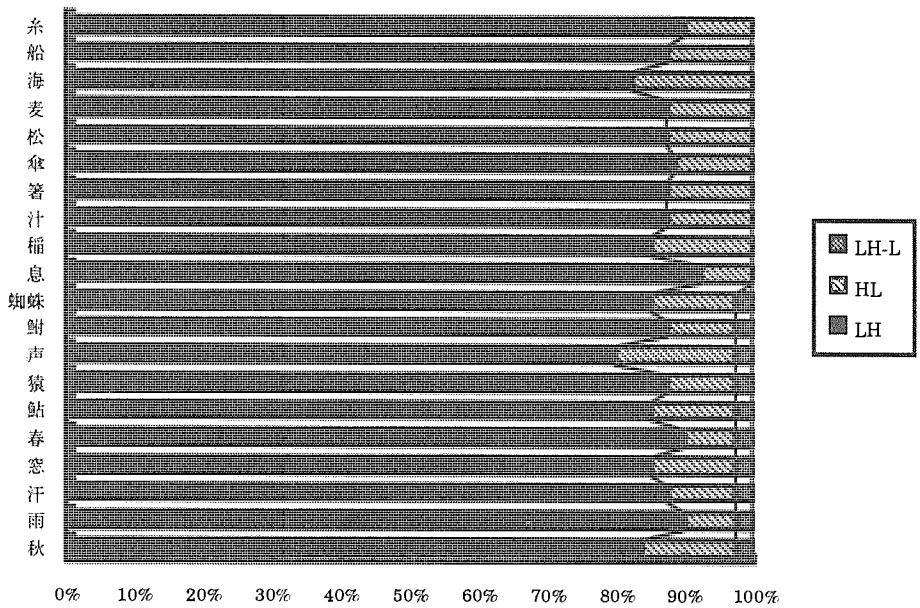


Figure 1 : 語単独のアクセント

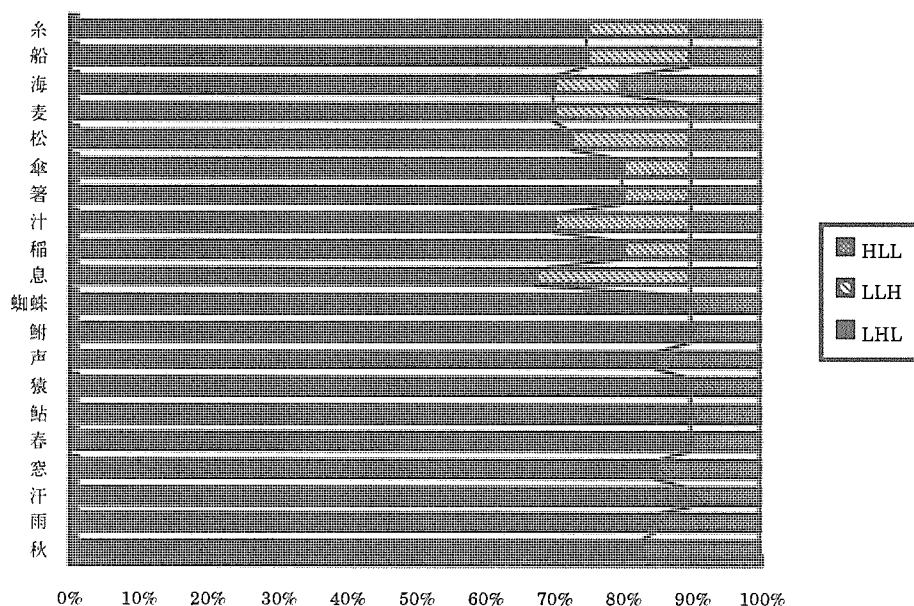


Figure 2: 語+助詞「が」のアクセント

話者別のグラフを見ていただきたい。AF～MFまでが女性、NM～TMまでが男性である。Figure 4では、全体として見た場合、LHLの使用が支配的であると言える。個々の話者を見ていくと、Figure 3では、AHとHFは他の話者とは異なり、HL型（いわゆる東京式アクセント）が支配的に用いられる。しかし、HFの方は語+「が」になると、LLHという伝統的な京阪式アクセントをよく用いている。性別に関しては、男性は語単独ではLHが、語+「が」ではLHLが支配的と言えるが、女性の場合は、LH, LHLが多く用いられてはいるが、被験者によって支配的な型が異なっている。つまり、女性の方が男性と比べて、3つのすべての変異形を用いているのである。AFなどは語単独でも語+「が」でもHL, HLLしか現れない。GF（Figure 4）のように3つの型を使い分けている話者は他には観察されなかった。男性の場合は、LHL型の使用が圧倒的に多く、LLH型の使用者はOM, PMの2名で、HLL型の使用者は皆無であった。このLLH型については、女性13名中6名、男性7名中2名の被験者が使用している。ただし、この型を支配的に使用しているのは、DF, HF, OMの3名だけであった。これに

は居住、出身地域が関係していると考えられる。DF と HF は大阪府南部に在住、OM は奈良県生まれであった。

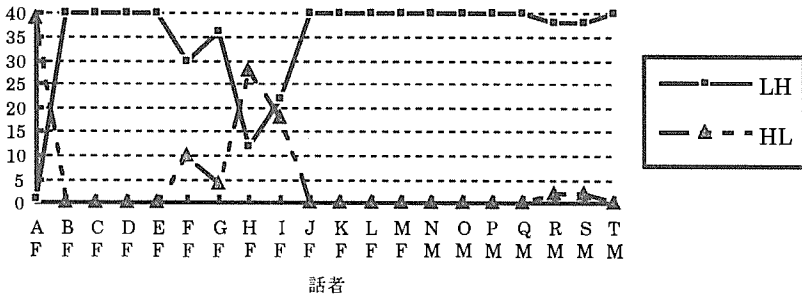


Figure 3: 語単独のアクセント：話者別

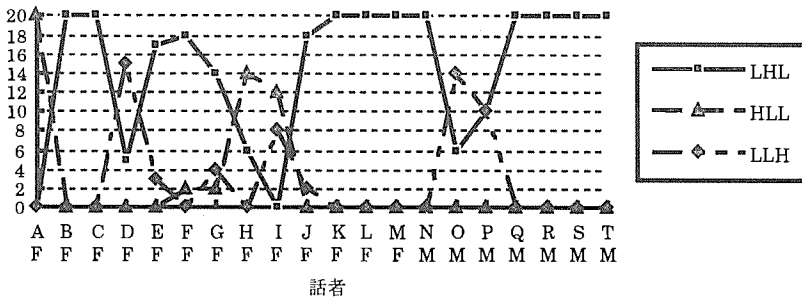


Figure 4: 語+助詞「が」のアクセント：話者別

最後に、前セッションでのアンケート調査からアイデンティティと言語使用・規範との間には強い相関があることが分かった。それでは、被験者個々のアイデンティティの強さと使用言語項目、つまり使用アクセント型の頻度との関係はどのようなになっているのであろうか。ここでは、Labov(1972)、Underwood(1985)と同様に、アンケート調査で得られたアイデンティティ項目の得点をもとに、12点から10点までの者を“very strong”、9点から7点までの者を“strong”、6点から4点までの者を“weak”、3点から0点までの者を“very weak”とラベルづけをし、使用アクセント型との関係を見ていくことにする。ただし、本調査では“very weak”に該当する被験者がいなかったため、“very strong”、“strong”、“weak”の項目だけを表に示した。

Table 2. 大阪人アイデンティティスコア

スコア	ラベル	人数
12-10	“Very strong”	14
9-7	“Strong”	4
6-4	“Weak”	2
3-0	“Very weak”	0

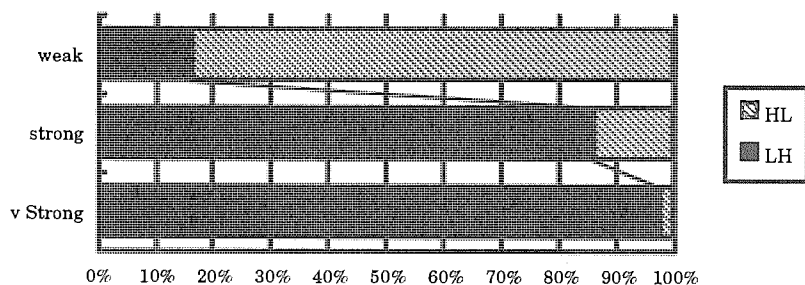


Figure 5 語単独のアクセント：IDEスコア

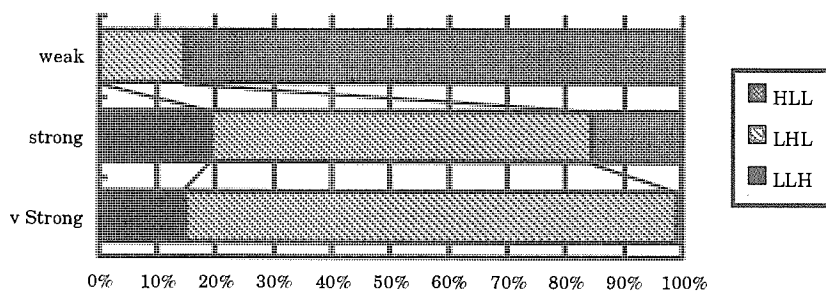


Figure 6 語+「が」のアクセント：IDEスコア

この20人の被験者の内の多くが強い「大阪人」アイデンティティを持っていることがうかがえる。Figure 5、6 から、アイデンティティスコアが高いグループほど語単独では LH 型を、語+「が」では LHL 型を多く用いていることが分かる。また、アイデンティティスコアが低いグループほど語単独では HL 型を、語+「が」では HLL 型を多く用いている。つまり、東京式のアクセント型を“very strong” “strong”よりも圧倒的に多く用いている。“Weak”の話者は AF、HF の2人で、Figure 3、4 から、この2人の発話では HL、HLL が支配的であることが分か

る。一方で、“very strong”のグループではHL、HLLの使用はほぼ皆無で、2例のみであった。

2.2.3 考察

Figure 1については、既に述べたが、明確に拍内下降をもつ話者は1人しか観察されなかった。拍内下降は衰退の方向へと向かっていると言ってもよいのではないかと考える。サンプル数が少ないため確定的なことは言えないが、この拍内下降の存在を考慮に入れたとしても、19才～26才の若者層では第IV、V類はほぼ融合を完成しつつあるのではないかと考えられる。

これまでこの2モーラ名詞のアクセント変化は、京阪式アクセントの共通語化の現象の例として報告されてきたが、LLH型が共通語の影響を受けてLHL型へ変化していると考えれば共通語化の現象とも考えられるが、真田(1987)の西宮調査のように、HLL型が支配的で、京阪式アクセントを持つ話者に定着しているとは考え難い。Figure 3, 4からも分かる通り、HL、HLLは特定の話者によって支配的に用いられるにすぎない。また、この原因の1つとして単語表を読むという調査方法が考えられる。書かれた文字を読むことで、そこに社会的規範が作用してアクセントが共通語化することが考えられる。タイプ1でHL(HLL)が支配的な話者もタイプ3のような文ではLH型になっている場合がある。これは、日常会話ではLH型を用いていることを予測させる。

しかし、この調査は単語表を被験者に読んでもらっただけの調査であり、必ずしも日常のくだけた会話でもこの調査で得られたアクセントで話しているとは言えない。単語表の朗読は自分の発話をよくモニターできる環境であると言われる。被験者の中には、「今のアクセントはおかしかった」と再度読みなおす被験者もいた。さらに調査方法を改善して、次の調査に臨みたい。

Figure 3, 4を見ると、HL、HLLを用いるのは圧倒的に女性であることが分かる。「大阪弁」に東京式アクセントが持ち込まれる現象は女性に起因するのではないだろうか。Figure 1、2、3、4を見ても、男性の場合も、女性の場合もLHL型が最も多く用いられていることは明らかであろう。しかし、LHL型への推移がどちらかの性によって推し進められているわけではない。一方で、伝統的アクセントと言われるLLH型は衰退の方向へと向かっており、LHL型への推移は完成の方向へと向かっている言えるのではないだろうか。本研究では第IV類の揺れの音声

的要因については詳しく触れてこなかったが、中井(1988)、岸江(1990)ではIV類のLHL化にはV類の拍内下降の消失が前提となつていているが、話者OMは唯一拍内下降を持つ話者であったが、Figure 4が示すようにLHL型の使用を認められる。

アイデンティティ・スコアと使用アクセント型の関係については、Figure 5, 6のようにアイデンティティ点数の低いグループが、外集団言語のアクセント型を多く用いているという点ではUnderwood(1985)のテキサス調査と同じである。しかし、Milroy(1992)によると、強いsolidarityをもつ集団は、外的影響に強く抵抗し、伝統的な言語項目を保持すると考えられる。Figure 5で見える限りでは、むしろ、この2つのグループでは新型LHLの使用が伝統型LLHを圧倒的に上回っている。また、Figure 6のグラフからは“very strong”と“strong”のLLHの使用率はそれぞれ約15%、約20%と“strong”の方が“very strong”を上回っていることが分かる。この差が有意であるとは考えにくいサンプル数を増やして考えて行きたい。それでは、何故強いアイデンティティをもつ2つのグループが伝統的なアクセント型ではなく、新しいアクセント型を用いるのであろうか。

結論と課題

本調査では、「大阪人」「大阪弁」へのアイデンティティと2モーラ名詞第IV類のアクセント変化の関連性を観察してきた。アンケート調査の分析から、「大阪人」「大阪弁」へのアイデンティティと言語使用の間には強い相関があることが分かった。さらに、発音調査では、アイデンティティを強く持っているものほど、新アクセント型のLHLを用い、弱いものほど東京式のHLL型を用いていることが分かった。しかし、解決されるべきいくつかの問題点が残っている。

問題点の第一は、変化の必然性の問題である。3でも既に述べたが、Milroy(1992)も言及しているように、集団への強いアイデンティティは伝統的な言語項目を保持する要因として働くと考えられる。Figure 6で見える限りでは、“very strong”と“strong”の伝統型であるLLHの使用は10%程度で、ほとんど変わりが無いと言ってよい。むしろ、この2つの集団ではLHL型の使用が伝統型を圧倒的に上回っており、この伝統型はむしろ衰退に向かっていってよい。それでは、何故強いアイデンティティをもつ2つの集団が伝統的なアクセント型ではなく、新しいアクセント型を用いるのであろうか。京阪式アクセントの2モーラ名詞は4つの

サブカテゴリー（1 / 2, 3 / 4 / 5）を持っていると言われる。このサブカテゴリーは、その存在自体が社会的機能を持っていると考えられる。このような強いアイデンティティを持っている集団であるならば、このサブカテゴリーの構造を壊す必然性はないはずである。「大阪人」集団は、アンケート調査から強いアイデンティティを持っていることが分かった。それでは、この集団があえてこの音韻的サブカテゴリーの構造に変化を推し進める心理的理由はいったい何処にあるのだろうか。残念ながら、今はこの問いへの答えは持っていない。

第二の問題点は、この調査の出発点とも言える「アイデンティティ」を言語変化を説明する社会心理的要因としてどのように取り扱うのかという問題である。1で地域アイデンティティと使用言語項目との関連性について述べられた研究の一つである Labov の Martha's Vineyard の調査を紹介したが、Labov(1972)は次のように述べる。

It is apparent that the immediate meaning of this phonetic feature is 'Vineyarder.' When a man says *ræut* or *hæʊs*, he is unconsciously establishing the fact that he belongs to the island: that he is one of the natives to whom the island really belongs.

このように言語変異とアイデンティティの間に関連性があるということは、他にも Le Page(1985)、Milroy(1992)らの調査から明らかであろう。しかし、少なくとも、私が行った調査からだけでは Labov が述べているようなことは断定はできない。アイデンティティは様々な社会心理的要因の一つにしか過ぎず、これらは複雑に絡み合って言語変化に関わっているのではないかと考えられるからである。また、「地域に対するアイデンティティ」は、私たち人間が持ち得るアイデンティティの一部に過ぎない。私たちは、複数の集団に属し、複数の集団に対してアイデンティティをもっているのが普通であり、場面に応じて、そこで表出すべき潜在的アイデンティティを選択するのである。それはいつも意識的に行われるわけではないのである。通常、自身の集団にきわめて強いアイデンティティを抱えている個人、集団でさえ、常にその集団以外の集団の言語の影響を受けている。さらに、Underwood(1985)は、“identification”を感情的なものとして位置付け、認知的構築物である「意識 (consciousness)」と区別している。このことは集団へのアイデンティティだけを社会心理的要因として言語変化を社会心理的側面から説明することは難しいということを示している。その集団の成員が外集団と内集団との関係

をどのように認識しているのか、内集団のもつ集団境界がどの程度の強さなのかといった対集団認知の考え方（この考え方はTajfelのSocial Identity Theoryによる。Social Identity Theoryに関しては、斎藤勇編(1988)が詳しく解説している）を用いることで、社会心理学的アプローチからも言語変化の説明が可能になるであろう。

三番目の問題点は、本調査で取り扱った現象を第二の問題点であげた集団間行動として考えるのであれば、それぞれの話者が内・外集団のメンバーからどのように認識されているのかを明らかにする必要がある。

このように言語変異と社会集団との関係を集団のメンバーシップの観点からだけで説明するのではなく、メンバーシップへの意識、つまりアイデンティティという観点も取り入れることによって、言語変異と社会集団との関係はより精緻な説明が可能になると考える。

参考文献

- 古畑 和孝、鈴木 康平、白樫 三四郎、大橋 正夫編 1984. 『現代社会心理学——個人と集団・社会』朝倉書店
- ハドソン、R, A. 1988. 『社会言語学』松山幹秀、生田少子訳 未来社
- 井出 祥子 1992. 「言語とアイデンティティ」月刊『言語』9
- 犬飼 隆・吉田 比呂子・柿原 律子 1989. 「近畿方言若年層のアクセント動向」神戸大学教育学部論集
- 岸江 信介 1990. 「大阪市若年層における二拍名詞アクセント」『日本語音声』研究成果刊行書『方言音調の諸相——西日本——(1)』徳川宗賢編
- Labov, William. 1966. *The Social Stratification of English in New York City*. Washington D.C.: Center for Applied Linguistics.
- , 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- (ed.), 1980. *Locating Language in Time and Space*. Academic Press.
- Le Page, Robert and A. Tabouret-Keller. 1985. *Acts of Identity*. Cambridge. Cambridge University Press.
- ダニエル・ロング 1990. 「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学』162

- Milroy, James. 1992. *Linguistic Variation and Change*. Basil Blackwell.
- Milroy, Lesley. 1980. *Language and Social Networks*. Basil Blackwell.
- Milroy, Lesley and Sue Margrain. 1980. "Vernacular language loyalty and social network" L. in *Society* 9 pp.43-70.
- 中井 幸比古 1987. 「京都市内における若年層のアクセント (1)」国語研究 50
国学院大学
- 中井 幸比古 1988. 「京都市内における若年層のアクセント (2)」国語研究 51
国学院大学
- 斎藤 勇編 1988. 『対人社会心理学 重要研究集 5 ー対人知覚と社会的認知の心理学ー』誠信書房
- 真田 信治 1987. 「ことばの変化のダイナミズム ー関西圏における neo-dialect についてー」言語生活 429
- 真田 信治 1990. 『地域言語の社会言語学的研究』和泉書店
- 真田 信治、ダニエル・ロング 1992. 「方言とアイデンティティー」月刊『言語』
9
- 杉藤 美代子 1982. 『日本語アクセントの研究』三省堂
- 徳川 宗賢、真田 信治編 1991. 『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社
- Underwood, G.N. 1985. "Accents and Identity" in *Methods in Dialectology. Multilingual Matters*.

Appendix: 単語表

次の語を文を2回づつ読んでください

1	秋	31	息
2	秋がきた	32	息が白い
3	もう、秋やなあ	33	息、白いわあ
4	雨	34	稲
5	雨が降る	35	稲がこうべを垂れる
6	雨やでー	36	稲、ぼっかりやなあ
7	汗	37	汁
8	汗がでる	38	汁が濃い
9	えらい、汗かいたわ	39	汁、うまいわあ
10	窓	40	箸
11	窓が割れた	41	箸がこける
12	窓、汚れてるでー	42	箸、ないのお
13	春	43	傘
14	春がきた	44	傘がない
15	もう、春やなあ	45	傘、忘れた
16	鮎	46	松
17	鮎が釣れた	47	松が倒れる
18	鮎、おいしいわあ	48	松、くさってるなあ
19	猿	49	麦
20	猿がいてる	50	麦がたなびく
21	大きい猿やなあ	51	麦、たべたことある
22	声	52	海
23	声が大きい	53	海が広がる
24	声、大きいなあ	54	海、きれいやなあ
25	鮒	55	船
26	鮒が釣れた	56	船が走る
27	鮒、食べたことある	57	船、大きいわあ
28	蜘蛛	58	糸
29	蜘蛛が飛ぶ	59	糸が切れた
30	蜘蛛、嫌いやねん	60	糸、ほつれてる